The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

南宋・洪适「擬古十三首」の擬作効果ついて

鈴木敏雄

一

清の学者汪師韓はその著『詩學纂聞』所収の「雑詩と雑擬の別」という論文[1]に於て、晋の陶淵明の「擬古九首」、陸機の「擬古十二首」、梁の江淹の「雑体三十首」、唐の李白の「擬古十二首」など、歴代の擬作詩に関して通史的な概観を行い、擬作詩は唐代以降その本来の在り方を失っていると指摘する。そして、擬作詩が本来の擬作詩たり得ている場合を「古意存す」という言い方で括る。それは、唐代では韋應物の擬作詩を唯一本来の在り方を留めるものとし、

有唐一代、惟韋蘇州「擬古」八首、古意獨存。

と言っていることから明らかである。一体「古意」（すなわち「擬」の本来の在り方）とは如何なるものか。それが六朝時代の陸機や江淹の取り組んだ擬作詩が持っていたような要素を言うらしいことは、

『文選』所載陸士衡「擬古詩」十二首、……無不顕然示人、是以謂之擬。此意後人不識也。

という論調からもある程度察しがつくが、汪師韓は「擬」とは「古に依りて以つて式と為す」ことで、それには模倣対象を判然と示す必要がある、という以上の詳細な説明を行なっていない。

ところで汪師韓は宋代に論及し、南宋の洪适の「擬古十三首」[2]（以下、篇次順に①～⑬の略称を用いる）中の何首かに関しても、唯一辛うじて「古意」を失っていないと指摘する。

宋洪文惠适「擬古」詩、毎篇首句直用古詩。如「明月皎夜光」・「冉冉孤生竹」・「迢迢牽牛星」・「青青河畔草」等作、詞未爲工、而古意不失。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

洪适（一一一七―一一八四　字は景伯）は、南宋の高宗・孝宗時代の人で、孝宗の時に中書門下平章事兼枢密使に拝せられて宰相となり、卒しては文惠と諡されている。「二回の講和で、南宋にも平和がおとずれた。金国との間が平穏になっただけではない。国内でも、いままでのような抗戦か和平かの政争も、ほとんどみられなくなった。また孝宗の二十八年間の治世の間、十七人も宰相がかわっていて、とくに権勢をふるったものもない。それだけ孝宗の政権は安定していたのであった。江南の開発もますますさかんであった。領土が縮小したにもかかわらず、経済的には北宋をしのぐ発展をしていたし、国家財政にしても北宋の規模を上まわるほどであった。[3]」と言われる時代の「十七人も宰相がかわっ」た中の一人で、経済政策に長けていた。宰相としては時代の風潮もあり、抗戦論者とはならなかったが、北宋の王安石の新法党の流れを汲む、金との和平を主張した秦檜一派の残党には対抗し続けた。著に『隷釈』があり、その詩文は『盤洲文集』に収められている。『宋史』巻三百七十「洪皓傳」に伝記がある。因みに、『容斎随筆』の著者である洪邁は洪适の三弟で、次弟の洪遵とともに「三洪」として知られる。

いま、その洪适の「十三首」に対し、汪師韓が「⑦『明月皎夜光』・⑧『冉冉孤生竹』・⑩『迢迢牽牛星』・②『青青河畔草』等の作の如き、……・古意は失はず」と言っていた点に着目したい。この一文は「古意」について知る手掛りを与えていると思われる。すなわち、洪适の「十三首」は擬作詩の型としては韋應物のそれと同様、いずれも「古詩十九首」の各篇を対象とするパスティシュ[4]であるが、汪師韓の論調を察すると、それは全て「毎篇の首句に直に古詩（「十九首」の首句）を用ゐる」ことを（これまで誰も試みなかったということで）変則的な特徴とする以外は、確かに模倣対象を判然と示した擬作詩であるにも拘らず、その中の「⑦⑧⑩②等の作の如き」もののみ「古意」を存するとする。言い換えれば、その他は汪師韓の目には「古意存す」とは映っておらず、たとえ詩題に「擬古」と銘打ってはあっても、端的に言えば擬作詩と認めていないことになり、一体、具体的にはどのような要素を備えれば「古意存す」或いは「古意は失はず」なのかが問題となる。

なお、洪适という一人の詩人の一連の擬作詩群が「古意」を存するものとそうでないものを併せ持つということは、洪适の「十三首」中に歴代の擬作詩の通時的な過渡的状況が共時的に露呈しているということでもある。従って、洪适の「十三首」に於て「古意」の有無を考察することにより、主として唐代以降に見られる、「古意」を存しないと言われる擬作詩（ただしパスティシュ）の構造も、ある程度見えてくるのではないかと思う。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

二

例に挙げられた⑦⑧⑩②を概観すると、いずれも模倣対象と言える原詩が判然と示され、しかも原詩との間に対応関係も見られるようである。したがってそのような擬作詩をひとまず「古意存す」と言ってよいと考える。六朝時代の陸機や江淹および唐代の韋應物の擬作詩は全て明らかにそのような要素を備え、汪師韓の論調とも合う。しかし洪适の「十三首」は全てそれとほぼ同様に見えるにも拘らず、汪師韓の論調では必ずしも全てが「古意は失はず」ではないようである。つまり、洪适の擬作詩にはその成否を決定付けるその外の要素があることになる。では、「古意」を決定するその外の要素とは何か。以下に⑦⑧⑩②について、それらが具備する要素を別個に見てみたい。

汪師韓の指摘順にまず⑦「擬明月皎夜光」詩を見ると、

明月皎夜光　　明月　夜光を皎(かがや)かせ
瑟瑟扇商籟　　瑟瑟として商籟を扇る
衡紀直西躔　　衡紀　西躔に直ぐに
雲章斜左界　　雲章　左界に斜めなり
感彼林薄凋　　彼の林薄の凋むに感ずれば
歳律倏云邁　　歳律　倏として云に邁く
蜻蛚誰汝憐　　蜻蛚　誰か汝を憐まん
悽悽鳴戸外　　悽悽として戸外に鳴く
昔我耐久朋　　昔　我が耐久の朋
着鞭道方泰　　鞭を着けて道　方に泰らかなり
尉藉繒縞輕　　尉藉すること繒縞のごと軽く
金蘭舊盟改　　金蘭　旧盟改まる
東井不及泉　　東井は泉に及ばず
須女無儔配　　須女は儔配無し
君看貢公綦　　君看たるか貢公の綦の
白頭媿傾蓋　　白頭にして傾蓋に媿づるを

この⑦は、印象的な詩語と、原詩の「十九首」其七ではあまり見られない典故の多用が目立つために、原詩との対応関係に些かの落差が生じ、洪适の主張が顕現しやすくなっている。例えば原詩の構成に着目すると、結二句は友を追い抜いて出世した旧友に対し、交友の在り方を一言戒める箇所であるから、擬作詩ではそこをどのように展開するかに期待がかかる。その期待に対し、洪适は「貢公」の典故で応じている。漢の清潔の臣である王吉は出世するとやはり清潔の臣である友人の貢禹を推挙し、ともに諫官として皇帝を諫めたという。つまり、洪适は原詩には無いこのような典故表現を用い、原詩とは別の概念を提示し、「傾蓋」すなわち交友に於ける背信行為を戒める独自の主張をより鮮明に印象深く描き出していることになる。この型の擬作

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

詩は、まさにそのように原詩との対応関係を作り（典故表現の有無とは関係ない）、そうすることで期待を誘って意表に訴える技巧を駆使したところに対比効果が現われるのではないかと考える。

そのような対比効果は内容面では強意の働きをする。この⑦の場合、結二句に収束させる際、その前で特に「盟」という語を用いた点に注目すると、「盟」は洪适の「十三首」中に三例見られ、この語がこれら一連の擬作詩群のキーワードであることをものがたる。『盤洲文集』中にも、

……玉節尋盟端不再、便回天上近凝旒。……
（「次韻梁憲再集盤洲」詩）

……扁舟乘興、尋訪戴之舊盟。……
（「會肇慶舊守樂語」）

……千里尋盟須擧白、海珍無謝五侯鯖。……
（「會汪正字樂語・詩」）

などと数多く見え、そこには「盟を尋（あたた）め」ることで盟友関係を維持しようとした思いが窺える。「十九首」では男女間の信頼関係がテーマの一つになっていて、先行作である韋應物の擬作詩はそれを踏まえ、友人や親しいもの同士の「貞」なる在り方をテーマとした。同様に洪适も、盟友同士の気心知れた交わりをテーマとしているように思う。「再賦」詩（巻六）でも「同盟非是新傾蓋、巧匠誰云老斲輪」と交友を詠む。詳細には論じないが、洪适の「盟」は友と共に俗気を払拭して自然の中に埋没することを意味することがあり、ここではその意味が上述の対比効果で強められ、説得力も高められていることに気付く。

なお、この⑦は汪師韓の指摘どおりよくできた擬作詩であると思われる。この型の擬作詩は構成を原詩に同じくするという原則があるので、おのずと展開が予測できる。したがって、展開がその予測と同じであれば期待に応えて説得力を増す。逆に予測との間にズレが生ずれば意外性を呼び起こし、それを梃子に強烈な印象を与えることができる。この⑦はそのような対応効果が概して有効に働いている。後半の展開も、原詩の襲句に近い「昔我……」という類似表現で予測を誘い、原詩ではかつての友達が自分を「遺跡」のように棄てたとするところを、擬作詩では魏の應瑒が出世した龐惠恭に絶交書を送り、旧友を「繒縞」のように軽んじたと非難した故事、および「金蘭の交はり（契り）」を典故に用い、「旧盟」の破棄を非難する思いを訴える。原詩と比較し、擬作詩ではどのような喩えを用いて擬作するのか予測しながら待っているところへ、期待どおりに或いは意表を衝く形で擬作詩人の思いを投影させる点に、擬作詩のスタイル故のもじりの妙味を覚える。なお⑦は陸機、韋應物に先行作がある。

次に、⑩「擬迢迢牽牛星」詩はどうであろう。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

迢迢牽牛星　迢迢たり牽牛の星
奕奕停梭女　奕奕たり梭を停むる女
尋盟整瑤轡　盟を尋(あたた)めて瑤轡を整へ
緘情遵漢渚　情を緘(と)ぢて漢渚に遵ふ
欣讌未斯須　欣讌　未だ斯須ならざるに
別愁眉已度　別愁　眉已に度る
黄月不我留　黄月　我を留めず
殘機忍重顧　殘機　重ねて顧るに忍びんや
翻羨巫山雲　翻つて羨む巫山の雲の
朝朝楚王遇　朝朝　楚王に遇ふを

一篇十句で韻が原詩に同じく、表現の特徴であるオノマトペも類似しているので、形式的な構成は原詩に似ている。ただし一読して気付くように二句一聯の対応が乱れ、内容的には原詩と幾分異なる。確かに擬作詩も織女星の思いを詠んではいるが、原詩が平素の織女星の思いを詠むのとは違い、七夕当日のそれを詠む展開になっている。擬作詩の織女星も、結局は牽牛星と逢っても「須臾」の逢う瀬は愁いを増すだけという思いに帰結するのは結句にある通りだが、「盟を尋めて」逢いに行く展開は原詩には無い。そのような展開は別に新しいものでなく、晋代にも七夕当日にすでに詩人たちに詠まれたものであるが、それを「十九首」の「迢迢牽牛星」詩と対置させた展開が、予測と期待の意表に訴える効果を生む。その点でこの⑩も一篇としては原詩との対峙関係を保っていると言えるのではないか。「尋盟」が交遊関係に関する洪适の主張を反映することはすでに指摘した通りである。なお結二句の典故表現は些か著名に過ぎ、汪師韓の指摘するように「工み」でない嫌いがある。陸機に先行作がある。

さらに⑧「擬冉冉孤生竹」詩および②「擬青青河畔草」詩はどうであろう。

⑧冉冉孤生竹　冉冉たり孤り生ふる竹
成陰幽谷中　陰を成す幽谷の中
聿來君子室　聿に君子の室に来たり
葛藟施喬松　葛藟の喬(たか)き松に施すがごとし
喬松千百尋　喬き松は千百尋なるも
攀附猶可窮　攀附すれば猶ほ窮むべし
思君江水深　君を思ふも江水深く
褰裳難往從　裳を褰ぐるも往きて從ひ難し
同心而偏棲　心を同じくして偏りて棲まふは
媿彼摩霄鴻　彼の霄を摩するの鴻に媿づ
灼灼芙蓉花　灼灼たり芙蓉の花
凌波媚芳風　波を凌ぎて芳風に媚ぶ
非不努力愛　努力して愛(め)でざるに非ざるも
秋至無歸鴻　秋至れば帰鴻無し

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

昔盟儻不寒　昔盟　儻し寒かずんば
誰歎久西東　誰か久しく西東するを歎かんや

構成を見ると、前半はほぼ原詩を承けるが、後半は多少乖離している。前半では先ず原詩の「兎絲附女蘿」を承け、結婚関係を何に喩えて展開するかに期待がかかるところで、擬作詩では「葛藟施喬松」と言い、夫を「喬松」に喩えて更に「君子」のイメージを帯びさせる。そして「君子」ならばどんなに隔たっても可能な気持ちの疎通がここでは阻害されていることを述べ、意表に訴えながら擬作詩人側の君子論に誘い込む。後半は原詩の「君」の「軒車」の迎えを待つ思いを承け、陸機の「擬西北有高楼」詩の結句に言う「思駕帰鴻羽、比翼双飛翰」を典故に用いて、「君子」でない者は「昔盟」にそむく可能性があるために「帰鴻」に駕し遅れ「比翼・双飛」できない、と展開する。そこに「盟」に関する洪适独自の主張が鮮明に印象付けられる。「賞梅」詩でも梅の属性を詠んで「倚竹盟三友、凌風粲一枝」と言うが、この⑧でも原詩の「高節を執る」が「盟に寒かず」に言い換えられ、「君子」の心による交遊を強調する点は看過できない。先行作は見あたらない。

②青青河畔草　青青たり河畔の草
英英籬邊菊　英英たり籬辺の菊
雅雅當窓女　雅雅として窓に当たる女
濯濯手如玉　濯濯として手は玉のごとし
淵淵錦中意　淵淵たり錦中の意
粲粲未盈幅　粲粲として未だ幅に盈たず
藁砧天一涯　藁砧は天の一涯
刀頭誤行卜　刀頭　行卜を誤つ
却鑑怨新眉　鑑を却けて眉を新たにするを怨む
誰教遠山緑　誰か遠山をして緑ならしむると

前半の「錦中意」や後半の「遠山」などの典故表現および後半の「藁砧」、「刀頭」という隠語表現の使用で、原詩との落差が顕著になる。少なくとも原詩はそのような修辞技巧をふんだんに用いていないので、擬作詩の構成を予想し展開に期待する意表を衝かれ、対比効果から言えば極めて印象的なものになる。このような際立った技巧は「十九首」の他の詩にも見られないので、擬作詩での使用の可否については論議が醸されること必至である。古い雑体詩のなかに「藁砧体」というスタイルがあり、『滄浪詩話』詩体篇で厳羽がそれを古詩の特徴の一つと見做しているので、洪适も或いは同時代に於けるレトリック論議に一石を投じているのかもしれない。

「錦中の意」からは、十六国の前秦の竇滔の妻である蘇氏が夫の気持ちを取り戻そうとして作った廻文詩体の詩を

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

詩中の女性も作っていることが想像できる。夫の還りを待つ女性をどのように描くのかと期待をかけているところへ、そのような典故を用いたことで、原詩に比べて女性の夫に対する強烈な思いを前面に出すことができる。司馬相如を思う卓文君の眉をイメージする「遠山」を用いた表現もそうである。原詩では「倡家の女」が「蕩子の婦」となったとだけ言う、いわば明言されない悲哀感と対比され、擬作詩ではいっそうの悲哀感を作り出す効果がある。ただし、構詞に「工み」でない嫌いがあることは否めない。陸機、劉燦および韋應物のほか、鮑令暉らにも先行作がある。

これら⑧と②は、ともに⑩とほぼ同様の構造を備えると言える。

以上の考察から、⑦⑧⑩②の四首は単に原詩が確かに有り、対応関係も見られるだけでなく、対応関係があることを前提とするために原詩の構成が予測でき、さらに展開が期待できるので、その展開の仕方によっては意表に訴える効果を持つことに気付く。これを擬作効果と見、今仮に「構成・展開の効果」と略称したい。なお、⑧と②は一見したところ対応関係は確かにあるものの、それが必ずしも明確であるとは言いきれない面が幾分ある。また、⑩も対応関係はあってもそれがかなり不明瞭な様相を呈しているように見える点は否めない。ただし、例えば次の⑫のように対応関係を殆ど欠いた、意表に訴える効果を期待できないものではない。⑫「擬孟冬寒氣至」詩は、

孟冬寒氣至　　孟冬　寒気至り
衝風一何厲　　衝風　一に何ぞ厲しき
宿楚失故陰　　宿楚は故陰を失ひ
思蟲柱哀喙　　思虫は哀喙(あいかい)を柱(ぁ)ぐ
客來門冬冬　　客来りて門冬冬
袖有尺書遺　　袖に尺書の遺る有り
一讀淚先零　　一読して涙先づ零ち
再讀心已醉　　再読して心已に醉ふ
妾如初開花　　妾は初めて開く花のごとく
君如長流水　　君は長しく流るる水のごとし
花挽水回難　　花は水を挽きて回り難く
水捐花去易　　水は花を捐てて去り易し
流水何時休　　流るる水は何れの時にか休まん
春榮難久恃　　春栄は久しくは恃み難し

前半は辛うじて原詩との対応関係があるものの、後半はほぼ完全に擬作を中止し、「花」と「水」の喩えを用いて原詩とは全く別の展開をする。なぜ「花」と「水」の喩えを取り入れたのか。理由の一つは、主張を鮮明にしようとする余り、先行作である劉燦と韋應物の作も承けてしまった

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

ことによるのではないか。例えば「一読・再読」の二句は劉燦の「一章意不盡、三復情有餘」を承ける。またその後も韋應物の「如何雨絶天、一去音問違」を承け、「天」と「雨」の関係を「水」と「花」の関係に置き換え、更にそれを六句に敷衍させたと見ることができる。このような擬作の仕方は、原詩だけを模倣対象と見て想起しても対峙の場に上がれず、比喩表現のみが突出して目立ち、構成を予測して展開に期待することが難しくなる。劉燦や韋應物の擬作詩を錯綜させる操作が加わって複雑化し、この⑫は果たしてどの程度の擬作効果が挙がるか疑問の生ずるところである。

三

では、上記以外の擬作詩について原詩との対応関係の有無および既述の「構成・展開の効果」の有無を見るとどうであろうか。

① 擬行行重行行

行行重行行　行き行きて重ねて行き行き
南北各倦游　南と北と各おの游びに倦む
昔人重別離　昔人は別離を重ね
一日嗟三秋　一日　三秋を嗟く
如何三秋暮　如何せん三秋の暮
相見尚悠悠　相見ることの尚ほ悠悠たるを
方寸正紆軫　方寸　正に紆ぼれ軫み
何以寫我憂　何を以つてか我が憂ひを写かん
仰瞻衡漢移　仰ぎては衡漢の移るを瞻
俯對蘭菊遂　俯しては蘭菊の遂ふに対かふ
臭味雖云同　臭味は同じと云ふと雖も
光塵若爲異　光塵は異と為すがごとし
迴風凄且發　迴風　凄として且に発せんとし
飄我別時袂　我が別時の袂を飄へす
欲知長相思　長く相思ふを知らんと欲し
披衣不勝體　衣を披くも体に勝へず

この①は、原詩との間に二句一聯の対応関係が見られない。もしも詩題に「擬行行重行行」と謳わず、初句において原詩句の襲句をしていなければ、「別離」を共通のテーマとし、換韻位置が同じである以外に、この詩が「十九首」中の「行行重行行」詩を原詩とする擬作詩である証しは無い。そうなると「擬古」ではあるかもしれないが、もはや「擬行行重行行」とは言えない。陸機、劉燦、韋應物に先行作があり、「行行重行行」詩を特徴づける例えば「胡馬・越鳥」の二句を、陸機は

王鮪懷河岫、晨風思北林。

と承け、劉燦は

NII-Electronic Library Service

寒螿翔水曲、秋兎依山基。

と承け、韋應物は

流水赴大壑、孤雲還暮山。

と承けるところを、洪适はもはや擬作しようとしない。全く無視したわけでなく、形式面では擬作しないかに見え、内容面では「臭味（相同じ）」という語で承けてはいる。そして擬作しようとする配慮は確かに各句随所に見られる。「別離」をはじめ、「各」「(遊)」「人」「重」「一」「日」「相」「且」「知」「思」「衣」などの語を何気なく共通させていることがそれを物語る。しかしだからと言ってそれだけでこの①が「行行重行行」詩を擬作したものだとは言い難い。二句目で「倦游」の語を出してテーマを夫婦から官游における別離に変えたまではよいが、その後、「昔人」の一般論を展開した時点で、唐代以降のいわゆる単なる「擬古」の域に陥る。例えば「胡馬・越鳥」を承けていないことは、やはりこの詩の「構成・展開の効果」が上がるか否かにとって致命的であると思える。少なくとも原詩に特徴的な比擬の対象は、対応関係を残しておく必要があろう。

洪适が「十三首」の第一首にすでにこのような取り組みを見せたことは、洪适も唐代以降の擬作詩の風潮の影響を一方では被っていることをものがたる。

この①は既述の⑫と同じ構造を備えると思われる。その他、次の⑬も同様である。

⑬　擬明月何皎皎

明月何皎皎　明月　何ぞ皎皎たる
舒光瑩窓綺　舒光　窓綺を瑩かす
宛轉羞空床　宛転として空床を羞ぢ
披軒步庭際　軒を披きて庭際を歩む
故愛同一心　故より一心を同じくするを愛せしも
新愁今兩耳　新たに今の両耳なるを愁ふ
咫尺相會難　咫尺すら相会ひ難く
苕苕若千里　苕苕として千里のごとし
況復千里隔　況んや復た千里隔たり
憂端無窮已　憂端　窮まり已む無きをや

前半四句で原詩の構成に沿って展開し予測を誘っておきながら、五六句目で原詩の「客行雖云樂、不如早旋歸」をいかに言い換えるかに期待がかかるところを、全く肩透かしの「兩耳」の喩えを持ち出し、「故愛・新愁」以下の後半六句を原詩と対峙する場から降ろしてしまっている。それは陸機、劉燦、韋應物に先行作があり、その中の劉燦の結二句「河廣川無梁、山高路難越」を承けて地理的概念を導入し、「兩耳」の喩えを用いて夫婦の隔たりを詠もうとしたからではないか。陸機およびそれを承けた韋應物は、

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

劉・洪とはまた別の展開をする。[5] その点でこの⑬は擬作詩の擬作詩であり、更にその後半は大幅な変換を行なっているために、原詩との対応関係を欠くに至っている。先行作を含めたあらゆる対応関係を想起しなければ擬作効果が得られず、そのために自ずと煩瑣な操作を要求され、「構成・展開の効果」に疑問が生ずる。展開に期待しても応えず、意表に訴えるものも乏しい。原詩と対峙しなければ擬作詩としての成立は危ぶまれるのではないか。

ここで、以上を仮にC類としたい。

③　擬青青陵上柏

青青陵上柏　　青青たり陵上の柏
櫹櫹庭中竹　　櫹櫹たり庭中の竹
人壽能幾何　　人寿　能く幾何ぞ
譬彼電過目　　彼の電の目を過ぐるに譬へらる
一觴命暱交　　一觴　暱交に命じ
且以慰心曲　　且つ以つて心の曲を慰めん
駕言長安游　　駕して言に長安に游べば
川光晨可掬　　川光　晨に掬ふべし
神州何赫戲　　神州　何ぞ赫戲たる
高城矗延屬　　高城　矗として延び属なる
嶢榭干星斗　　嶢榭は星斗を干し
彫栖錯珠玉　　彫栖は珠玉を錯ふ
鱗鱗王公第　　鱗鱗たり王公の第
華纓夾繡轂　　華纓　繡轂を夾む
放懐恣槃虞　　懐ひを放ちて槃虞を恣にすれば
端憂竟誰逐　　端憂　竟に誰か逐はんや

構成・展開をはじめ、テーマも概ね原詩に沿っている。前半では先ず、原詩が「客」に喩えた人生を何に喩えるかに期待がかかるが、それを擬作詩では「雷」に喩えている点に洪适の独自性が窺えると言えば言える。なお、「川光を掬す」には、後に触れるように、「暱交」すなわち昵懇の盟友と自然観賞に埋没しようとする洪适の主張が集約されている。この③は先行する陸機、鮑照、韋應物の作に比べ、特に取り立てて言うべき新概念が提示されておらず、擬作詩としての妙味はあまり感じられない。

この③は⑦と同じ構造を備えるといえる。その外④⑤⑪も同様である。

④　擬今日良宴會

今日良宴會　　今日　良き宴会
朋簪故人家　　朋は故人の家に簪まる
搖情緑綺琴　　情を搖がす緑綺の琴
度曲漁陽撾　　曲を度る漁陽の撾
放歌掀醉髯　　放歌して醉髯を掀げ

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

晤語粲春葩　晤語して春葩を粲かす
列坐各知心　列坐　各おの心を知り
游揚相齒牙　游揚として相齒牙す
芬芳須及時　芬芳　須らく時に及ぶべし
東扶忽西斜　東扶　忽として西のかた斜く
胡不厲逸翮　胡ぞ逸翮を厲まし
天津問仙槎　天津に仙槎を問はざる
無爲甘寂漠　為す無かれ寂漠に甘んじ
痼疾守煙霞　痼疾　煙霞を守るを

形式的には原詩に沿って富貴を求めよとの呼び掛けを行なうが、テーマは「煙霞の痼疾」すなわち自然観賞への没入を指向し、原詩とは趣向を異にする。

構成を見ると、前半では心を同じくして宴会に集まった者たちが、音楽によって自分たちの「意」を表明する場面を描く。その際、原詩は彼等の「意」が込められた音楽を「逸響」、「新声」とだけ言い、彼等はまた「意」は皆同じであることを感じつつも、気ぐらいが高く本音を伸べることをしない、とする。ところが、擬作詩では「緑綺の琴」や「漁陽の撾」で音楽を演奏する場面を描き、漢の司馬相如や、魏の武帝の不興を買って太鼓吏に落された禰衡のような人物の集まりであることをイメージさせ、そのような人物たちが歯に衣を着せずに「醉髯を掀げ」、李白粲花の論同然に銘々の思いを議論し合う姿を描く。また後半の展開では人生は時間が無いことを言い、「なんぞ……ざる」、「……為す無かれ」と言って人生の有効な過ごし方を提示するが、原詩が出仕せよと言うところを擬作詩は隠退の方向へ向かう。そこには晩年に盤洲に隠居して自然の中で自適の生活を送ることになる洪适独自の価値観が反映されていると見たい。この④は「窮賤を守る無かれ」「要路の津に拠れ」という古詩的人生観に対し、その意表を衝いて「寂寞に甘んずる無かれ」「仙槎を問へ」という別概念を対峙させ、人生の在り方に改めて論議を醸し、古典的先入見に再考を促す構造を持たせていること言うまでもない。陸機に先行作がある。

⑤　擬西北有高樓

西北有高樓　西北に高楼有り
偃蹇軼千門　偃蹇として千門に軼ぐ
綺櫳納飛月　綺櫳　飛月を納め
璧璫礙翔雲　璧璫　翔雲を碍む
上有絃歌女　上に絃歌の女有り
哀聲啓鶯唇　哀声　鶯唇を啓く
誰能爲此曲　誰か能く此の曲を為す
無乃返香人　乃ち返香の人無からんか
一章三致志　一章に三たび志を致し

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

脩蛾有餘響　脩蛾に餘響有り
不惜饒清響　惜まず清響の饒きを
暗驚梁上塵　暗かに梁上の塵を驚かす
所悲聽者心　悲しむ所は聴く者の心の
中無涇渭分　中に涇渭の分無からんこと
願作南冥鳥　願はくは南冥の鳥と作り
夕飲玉池津　夕べに玉池の津に飲まんことを

前半では原詩の構成に沿い、悲哀を帯びた声で「絃歌」する女性の居る場所を描いて展開の予測を誘い、原詩句の襲用に近い口調の七、八句目「乃ち……無からんか」に繋いで女性の資質を規定する。その際、女性に嫦娥の棲まう「飛月」と仙界の「翔雲」が見える部屋に居るイメージを付与し、原詩の「杞梁妻」を「返香人」で言い換えて神仙的雰囲気を帯びさせる。「返香の人」は亡くなった者の魂を「返魂香」（「返生香」）を用いて呼び戻そうとする人のことであるから、原詩の夫を亡くした「杞梁の妻」を解釈した語であると同時に、単に同じ概念を別な語で言い換えただけでなく、より悲壮感を添え、しかも仙気を覚えるように作っていることになる。「十九首」の「杞梁妻」は著名に過ぎ、権威的である。その権威的先入見に対し、擬作詩では別の見解を対峙させて新たな論議を提供する。したがって後半以降、例えば結二句でも、原詩のように知音を求める「双鳴の鳥」となりたいとするのも一つの見解であるが、「南冥の鳥」となり「玉池」（天池）に翼を休めたいとするのもまた一つの見解として存在することに気付かされる。擬作詩はこのように既成の先入概念に効果的に作用し、それを活性化させ、再考を促すという心理的反応を呼び起こすところにその特性が見られると言える。陸機、韋應物に先行作がある。

⑪　擬人生不滿百

人生不滿百　人生　百に滿たざるに
蟪蛄等春秋　蟪蛄のごと春秋を等つ
花月多風雨　花月には風雨多きに
何不蠟屐游　何ぞ屐に蠟して游ばざる
朱光忽以馳　朱光は忽として以つて馳せ
退舍未易留　退舍は未だ留め易からず
生前一杯樂　生前　一杯の楽しみは
難與昧者謀　昧者と与には謀り難し
臨流羨芳沚　流れに臨みて芳沚にて
歡言泛輕舟　歡び言りて軽舟を泛ぶるを羨む

概ね原詩の主題に沿って二句一聯ごとに原詩句を言い換えつつも、前半は『荘子』逍遙遊篇に典故のある「蟪蛄」をはじめ、「花月」、「風雨」、「朱光」、「退舍」などの自然景

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

物を出して時間の推移を表現しようとする点で原詩に異なる。そして原詩の「昼は短く夜は長し」に対し、「花月には風雨多し」と展開して対峙するところに、ここでもまた洪适独自の自然観賞の精神が現れる。また、原詩と同じ口調の「何ぞ……ざる」で予測を誘っておいて、原詩の「燭を秉る」に対して「屐に蠟す」を出す点は、その故事の典拠である屐に蠟を塗って贅を尽くした晋の阮孚のほかに、特製の屐で山水を跋渉した宋の謝霊運が想起され、自然観賞がテーマとして焦点化される。そしてそれは原詩のように「王子喬」すなわち仙人に対する断ちきれない思いを詠むのでなく、結句に見られるように逆に「昧者」でない者達と花咲く汀で船を浮かべながら語らうような自然観賞に対して洪适が積極的な姿勢を示そうとしている点にいっそう顕著である。恐らく原詩が問題として投げ掛ける「遊び」をどう遊ぶのかの一つの解答として賢者との自然観賞を提示し、そうすることの如何を論議として醸し出そうとしているのではないか。この自然観賞の精神が洪适にとって更にどのような意味を持つのかは詳述しないが、それがこの一連の擬作詩群の主要テーマの一つでもあることを、ここに改めて付記しておきたい。先行作は見当らない。

以上を仮にA類としたい。

⑥　擬渉江采芙蓉

渉江采芙蓉	江を渉りて芙蓉を采れば
芳蕤蔭幽沚	芳蕤　幽沚を蔭ふ
相思不相見	相思ふも相見ず
芬香欲誰遺	芬香　誰にか遺らんと欲する
秋容感人心	秋容　人心を感ぜしめ
浪浪睫涵涙	浪浪として睫　涙を涵す
不如膝上琴	如かず膝上の琴の
哀音入君耳	哀音　君が耳に入るに

前半四句は原詩に擬作したが、後半四句は望郷の念をどのように承けるかに期待がかかるところを、展開をかなり変え、まず秋景色に話題を移す。そして結二句で陶渕明の「閑情賦」に典故をとる「膝上琴」を用い、原詩の「同心而離居」を承けて離れたくない思いを強く出す。微妙なところで一見二句一聯の対応を欠き、「展開・構成の効果」に疑問が残るが、意表に訴える要素は削がれていないのではないか。陸機に先行作がある。

⑨　擬庭前有奇樹

庭前有奇樹	庭前に奇樹有り
黄鳥巣其枝	黄鳥　其の枝に巣くふ
之子不顧反	之の子　顧み反らず
失此熙春期	此の熙春の期を失ふ

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

采采未盈匊　采り采りて未だ匊に盈たざるに
夕風已紛披　夕風　已に紛披す
路遠悵莫致　路遠ければ致す莫きを悵く
雖多亦奚爲　雖ひ多きも亦た奚をか為さんや

一篇八句と短いため、よほど工まない限り、「展開・構成の効果」は期待できない。そのためか、原詩の手法とは異なり、早くも第二句目で『詩』の六義の「比」の手法を用いて「黄鳥」を引き合いに出し、「奇樹」を女性に比擬する。そして前半で、原詩が「奇樹」の花をこれから贈ろうとする意志を描くところを、擬作詩は早く顧みないと花の時期を失うと展開し、夫を待つ女の移ろい易い「熙春の期」に対する危機感を始めから強調する。また後半では原詩が花が袖いっぱいに「盈ち」たと展開しているところを、擬作詩では未だ「盈ち」ないうちに「夕風」が花を散らせたと展開し、「盈ち」るまで待てない思いを強調する。その際、擬作詩では原詩に無い「夕風」の概念を導入して展開し、女性の「春」に対する危機感を技巧的に強める働きを担わせていると思われる。「夕風」は例えば陸雲の「答顧處微」詩に「朝華未厭、夕風已扇」と見え、時を待たないものの一つの代表である。なおこの⑨に関して感想を言えば、原詩との対応関係は保ちつつも「展開・構成の効果」は工んだほど顕著でないように思う。陸機、韋應物に先行作がある。

この⑥⑨は⑧②と同じ構造を備えると見、これらを仮にB類としたい。

以上から、A類（③④⑤⑦⑪）は原詩との対応関係が明確で、「構成・展開の効果」を得ていると言えるのではないか。B類（②⑥⑧⑨⑩）も、原詩との対応関係に一部明確でない箇所があるものの、ほぼ「構成・展開の効果」は得ていると思われる。C類（①⑫⑬）は原詩との対応関係がかなり不明確で、「構成・展開の効果」も薄い。従って、A類と、微妙ではあるがB類は、汪師韓指摘の上記四首を含むものでもあり、「古意」を存すると言ってよいが、C類はそれを失っていると見たい。つまり、擬作詩の成否を決定する「古意」とは、「構成・展開の効果」という要素の有無に係っていると言えないだろうか。

この型の擬作詩には原詩もしくは模倣対象が確かに有るものと、漫然として分からないものとがあり、汪師韓の論調では後者は「古意」を存しないこと言うまでもないが、前者でも単に原詩もしくは模倣対象のテーマを会得しているだけでは「古意存す」とはならない。原詩もしくは模倣対象との対応関係がはっきりと見られる上に、「構成・展開の効果」すなわち擬作効果によって擬作詩人側の主張が鮮明にされる擬作詩こそ本来の擬作詩たり得る要素を備え

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

たもの、すなわち「古意」を失わない擬作詩であると言えると結論付けたい。

四

洪适の「十三首」のような型の擬作詩に於ける「古意」とは、「構成・展開の効果」が得られる要素を備えることであるとすると、六朝時代には殆ど見られなかったさきに触れた李白や更に明の高啓らが取り組んだ、原詩の判然としない、したがって模倣対象との関係を加味しながら読むことの難しい擬作詩の構造も、勢い見えてくるのではないか。

それには、既述したように、「古意」を失ったと見做せるC類が重要な関鍵となると考える。C類は擬作意識はA類B類に同じであるが、不即不離の原則に沿わずに擬作されたために、原詩から乖離している。したがって詩題にそれと明示されなければ（首句に直に「古詩十九首」の首句を襲用することは今は措いて）模倣対象が喚起できず、換言すれば、もはや原詩の判然としない、類似しつつ対峙する際に生ずる擬作効果も漫然としか得られない擬作詩に極めて近くなっている。そしてその上でなお「十九首」の残像を保存しようとする。それがC類の特徴である。なぜか、或いはなぜC類は結果的に原詩の構成・展開には模倣せず、部分的な詩句・語句のみを模倣するのか。それは一つに、類似語句によって（恰も典故表現のように）部分々々でのみ「十九首」の詩句を想起させ、それと独自の斬新な句造りとを、あくまでも部分において対峙させることで意表に訴え、自らの主張を印象的に表現しようとするからではないか。典故表現のようにオーバーラップ効果を得るのでなく、あくまで詩句・語句造りの斬新さを表現の決め手とする。一篇全体の構成を知っていて展開を予測できる擬作詩ほどの効果が得られるかは疑問だが、古典的な先入見を対峙の場に呼び出し、部分的に論議を醸すことはできる。原詩が明確でない唐代以降の、例えば漫然と「十九首」に似ている「擬古詩」は、恐らくこのC類と同じようなレトリカルな効果を狙って作ってあるのではないかと考える。

洪适の「十三首」は、恐らく陸機や韋應物の取り組みに触発され、擬作という取り組みそのものに先ず真似たものであろうが、元来、擬作詩人が模倣対象を求めるのは、一般にそれを偽装の道具として利用したり、或いはその作品としての良さを顕彰して称賛したりするほか、時には擬作詩人側の主張と合わない点を改変したもの（すなわち擬作詩）を対方に据え、対峙効果を利用して考え方の相違を浮き彫りにしたりもする。「擬」型の擬作詩は模倣というレトリックを用いて原詩と類似させながら対峙させ、意味のコントラストを鮮明にする文体でもあるとすれば、洪适の

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

取り組みの意図はまさにそこにある。原詩に選ばれる詩はもともと由緒ある古典であって、いわば一種の先入見を植え付けている。「擬」型の擬作詩はまず類似することでそのような古典を想起させ、模倣対象として比較の場に呼び込む。そしてその先入見と対峙し、自己の主張を鮮明に展開する。類似的展開では先入見を覆すことなく権威的な表現で安定感を与えるが、対立的展開は意表を衝く発想のおもしろさ、先入見を破る斬新な見解を知らしめる。擬作詩は反権威側に回るとパロディになる。[7] しかし、当時の擬作詩の多くは文学の担い手の性質上、どちらかといえばまだ権威側にあったようである。洪适も例に漏れず、安定指向である。その殻を破るのは恐らく魯迅ら近代に入ってからであろう。[8]

洪适は作詩する際、日常の飲酒のような拘泥の無い境地で古人や古詩の語に倣えば充分であるとし、奇抜な語を用いて人の意表に出る詩を企図することを好まなかったようである。『盤洲文集』巻八に次のような五絶（「盤洲雑韻」上・一詠亭詩）がある。

有水足浮醴　水の醴を浮かぶるに足る有れば
寧拘秋與春　寧ぞ秋と春とに拘らんや
共將詩擬古　共に詩を将つて古に擬すれば
不必語驚人　必ずしも語人を驚ろかさず

盟友と自然の中に埋没することを指向する洪适は、擬作詩においても安定した権威を覆す取り組みまではしなかったと思われる。

注

① 「清詩話」所収の「雑詩雑擬之別」をテキストとする。
② 『盤洲文集』巻一（「四部叢刊」所収）に登載の本文をテキストとする。
③ 『世界の歴史』6「宋朝とモンゴル」（社会思想社「教養文庫」所収）に拠る。
④ 模倣対象を一首に限定した、いわゆる替え歌、もじり歌の類を指す。ただし、洪适の場合はパロディー性はない。
⑤ 原詩に対して陸機は「涼風・寒蟬」、韋應物は「芳樹・春禽」の語をそれぞれ新たに喩えとして導入し、夫婦のあるべき姿を詠む。
⑥ 六朝時代では陶淵明の「擬古」九首、鮑照の「擬古」八首がそれに該当する。
⑦ 佐藤信夫『レトリック認識』第8章「暗示引用」（「講談社学術文庫」所収）を参照した。
⑧ 魯迅に後漢の張衡の「四愁詩」に擬した「我的失恋」詩がある。「四愁詩」を権威的な失恋詩と見、そのパロディーを作って先入見に基づく当時の恋愛観を覆した。

NII-Electronic Library Service